

弘安寺銅造十一面観音 及び 脇侍 不動明王・地藏菩薩立像

昭和三年四月 国重要文化財指定
所在地 新鶴村大字米田堂ノ後甲一四七（弘安寺観音堂）
所有者 弘安寺

「普門山円通院弘安寺観音像 文応元（一二六〇）年 下野国那須郡雲岩寺ヨリ厳知ト云ウ僧来タリ 一字ヲ結ビ中田庵ト号ス 弘安二（一二七九）年 本村ノ住富塚伊賀守盛勝臨濟宗ニ歸衣シ 嚴知ヲシテ濟家シ 境内ノ観音堂ト年号ヲ取り普門山弘安寺ト号ス」
とある。

此の頃大沼郡佐布川村（現会津高田町）に江川常俊という豪農が住んでいた。土地の人々は長者と呼び、多くの土地山林を持って何不自由のない生活であったが、この常俊夫婦多年にして子宝に恵まれなかったので、当時会津の霊場である雀林法用寺の十一面観音に祈願した。

その夜、妻は菩薩に揺り起こされる夢を見て孕み、一人の女子をもうけた。夫婦の悦び、一方ならず。常姫と名付け、乳母をつけて大事に養育した甲斐があつて、眉目秀麗な姫に成長した。

文永一〇（一二七三）年には早くも十七才の春を迎え、その御礼参りにと、法用寺の虎の尾桜（会津五桜の一つ）の満開を期として姫を美々しく着飾らせ、母自ら供をつけて参詣した。

その頃、中田館主富塚伊賀守盛勝も、今を盛りの花を觀ようと、齊藤、国分、原田等の腹臣を俱して法用寺に参詣に来た。

盛勝二十才。容姿端麗の若殿と会つた常姫は、屋敷に帰り恋の病床に臥す事となつた。

常俊夫婦は色々と手を尽くしたが、文永一〇年六月一七日逐に黄泉の客となつた。夫婦は涕涙悲泣して止まなかつたが、やがて意を決して、常姫の菩提を弔う為に常姫と等身大の観音尊像を鑄造する事とした。長者邸から十七頭の牛の背で七日間、銅を長尾山（今の奥院）に運搬したと言う。しかし、全財産を挙げた工事もみちのくの片田舎で技法もよく分からないままに着手したので、容易に鑄型にはまらず困難を究めた。その時飄然と白衣の聖人が現われ、鑄型造りの技法や熔解の術を教えてくれたと言う。

十一面観音 像高六尺一寸七分

脇侍右地藏菩薩 像高三尺一寸

脇侍左不動明王 像高三尺一寸四分

この三尊共に鎌倉時代の鑄像として、東北地方に於ても珍らしい像であるといわれる。

会津三十三観音の三十番札所であり、会津三コロリ観音でもある。